

2009年秋学期レポート

2009年の秋学期に履修したクラスは次の通りである。ALT70 English Language Study : Reading and Writing Skills、CAP 195 Special Topics、PHI104 Critical Reasoning、LIN263 Introduction to the Structure of American Sign Language

(ALT70 English Language Study: Reading and writing Skills)

夏休みの間に受けたプレズメントの結果、大学レベルの英語力を高めるためにALT70を受けることになった。ALT70のクラスの目的は、語彙力を増やすため、またリーディング力を身につけるためである。毎クラスごとに、単語10ずつを記憶しながら、除々にボキャブラリー力を強化していき、次のクラスに復習をすることになっていた。リーディングは、New York timesで大好評だった「Impact」という3人黒人男性のサクセスストーリーの本を読む事になった。毎週その本の一章ずつビデオでまとめて先生に送るようになっていた。なぜビデオなのかというと先生の話によれば、英語でのレポートだと、時々曖昧な表現になってしまう可能性があるため、ビデオだとリーディング力が高めているかどうか、アメリカ手話を通して理解ができるということだった。各一章ほどアメリカ手話でまとめるのは意外と難しかった。リーディング力が弱いこともあって、クラスメートに内容を確認してもらいながら、それからアメリカ手話でビデオを撮る。その度にクラスメートに表現のチェックしてもらうなどの工夫をした。その為のプロセスが、普通の二倍ぐらい時間がかかってしまうのだが、その分リーディング力が高まっていくのを感じた。それだけでなくアメリカ手話の表現力も磨くことができた。学期末には各章をまとめてプレゼンテーションをする機会があり、評価する人は先生のみだけでなく生徒も一緒であった。やはりプレゼンテーションは慣れなのか人を惹きつける力があるろう生徒がいたり、それぞれ個性が出ていた。私の場合、緊張していたのもあって思う通り進めることができなかつたり、少し細かいミスなどが続いてしまったが、無事に終わることができ安心した。先生はフィリピン出身なので留学生の立場を理解してくれたこともあって、クラス以外にも個人的に宿題に対する質問にも対応してくれたりと親切だった。

(CAP195)

CPAクラスは、ALT70と共に必要な科目であり、クラスではキャンパスライフについて新入生対象にタイムマネジメント、宿題など学生生活を順調よく過ごすためにはといった内容を学んだ。実際、日本で短期大学に通った経験があるので、その頃の経験を含めて、参考になることも多かった。クラスでは課題本を読むことが課題になっており、その本は「Hands of My Father」というろう両親を持つコダ、Myron Uhlberg氏が書いたものである。Uhlberg氏は、小さい頃から通訳という役割を担っていて、それを通してその時代のろう者の歴史的背景や社会から見たろう社会の存在などについて書かれていた。それだけでなく、ろう両親同士の出会なども詳しく書かれてあった。今のろう社会と比べて、昔は、仕事など生活面の苦労が多かったと本を通して知る事ができる。それだけでなく、今の若いう者もその様子を知ることによって考えさせられるだろう。著者は実際に大学を訪ねて講演しており、講演だけでなく、各クラスごとに1時間程、生徒達のために時間をつくってくださり、質問に答えられたりなどとフレンドリーな方であった。著者は、昔の手話を使っていて時々読み取りにくいところもあったのだが、このように実際に対面し、お話できる機会というのはめったにないことだろう。ただ、著者の職業は手話通訳ではなく、服立て人だったのが意外であった。

(PHI104 Critical Reasoning)

秋学期の中で一番大変だったのが、このクラスである。哲学を基礎に様々なテーマを取り上げ、議論することが多かった。しかし、先生の説明が曖昧なと、授業の進め方がわかりにくかったこともあって、クラスメートから協力してもらいながら、内容を理解するように工夫していた。先生の他にもアシスタントがいたので、クラスの後にはグループスタディを機に、復習しながら授業を追いつけることができるようにした。後になってレポートを作成する際に、そのことが大変役に立ったことに気づいた。筋の通ったレポートを作るためには、分析力を身につけることが道理にかなう議論につながるし、また質の高いレポートを仕上げることもできるということに繋がるということも分かった。

(LIN263 Introduction to the Structure of American Sign Language)

このクラスは、アメリカ手話の入門であり、秋学期のクラスの中でも一番お気に入りのクラスであった。主な内容としては、手話言語学を中心であり、

言語学に関する基本的な知識を学んだ。まず、ろう者は、医学的視点と文化的視点があり、それぞれの定義が異なっている。例えば医学的視点の場合は、聴覚に障害を持っている人と対象に聴覚障害者と呼ばれている。その一方、文化的視点になると言語、経験、価値観を中心とした視点になり、手話と「ろう者のアンディティ」を中心に含まれそれだけでなくろう者共通の価値観、経験と伝統がある。そのように医学的と文化的視点の違いがはっきりと現れている。自然言語では9つの特徴があり、主な内容としては次のとおりである 1) A mode of communication, 2) Semanticity(意味性)、3) Pragmatic Function (実用的な機能主義)、4) Interchangeability (互換性)、5) Cultural Transmission (文化的伝承)、6) Arbitrariness(恣意性)、7) Discreteness(離散性)、8) Displacement (置換)、9) Productivity(生産力) これらの特徴は手話にも当てはまり。言語として体系的に確立することができることがはっきりとわかる。また、手話言語学の父と呼ばれるストーキー博士の理論1)Location, 2)Handshape,3) Movement 4)Orientationを使って一つの手話単語を分析した。分析するためには手話をどのように記録するか一つの目的であり、簡単そうで難しかった。学期末テストは、1学期に学んだ内容を活かして、テーマを決めて研究し、それからプレゼンテーションをするというものだった。私の場合、日本手話を使った話をテーマに決めた。そのテーマはどのカテゴリーが、新しい言語を理解できるかの目的である。どのようにカテゴリーを分類づけたかという、話者が「アメリカ手話のみ」か、「アメリカ手話および外国の手話を知っている」か、また「3つ以上の言語を知っているのと、もしくは指文字、キュードサインをしっている人」を対象にし、日本手話のビデオを見せた。そのビデオは、世界共通のイソップ童話「ウサギとカメ」である。それを対象者に見せ、どの単語、内容を理解できるか、結果を出していくというものである。その結果、3つ以上の言語を知っている人と様々なコミュニケーション手段を知っている人ほど、理解度が高いほどがわかった。それだけでなくその童話の内容を知っているかどうかは、人による。なぜならその童話は、アメリカと日本の違いがはっきりと現れている。日本の場合、背景は山になるのだがアメリカの場合は道になるようだ。生徒の一人は、両親の都合によりハワイに住んだことがあり、日系人の交流が深かった。それを通して日本文化を学んだお陰で、プレゼンテーション中にビ

デオを見せたとき、日本手話がわからなくても背景などの様子ですぐ答えがわかったそう。言語と文化は切っても切れないほど深い関わりがあることがわかる。つまり、日本手話を学ぶ時には文化を理解する重要性が高いことが、その研究を通して改めて実感した。